

補論・北朝鮮再訪記

金正日の死は「亡国への扉」を開いた？

田畑 光永

昨年末、北朝鮮の金正日・労働党総書記が死んだ。本誌昨年11月号に私は「北朝鮮再訪記」を寄せたが、その時点ではあの国の今後についてはまったく予測不能であった。というのは、見たところあの体制が長続きするとは思えなかったものの、さりとて金正日を頂点とする暴力的な支配体制にいつどこからひびが入るのか、見当もつかなかったからである。

たまたま昨年9月9日の建国記念日にはピョンヤンにおいて、民兵の軍事パレードを見る機会を得、終了後、同総書記が子息で後継者とされていた金正恩大将をともなつて閲兵台の上から下の参列者に手を振って歩くのを数メートルの間近から仰ぎ見るような形で目撃した。その時の印象では顔色もよく、動きにも不自然さはなかった。3カ月後にその権力者が急に姿を消すとは想像の外であった。周知の如く北朝鮮は、故金日成主席の生誕100周年、金正日総書記の生誕70

周年にあたる今年、2012年を「強盛国家の大門を開く」特別な年として設定していたから、それを目前に権力者の死が訪れたことは、スローガンとは反対に、ついにあの国の「亡国への扉」が開いたとの感がしてならない。

そこでそれに至る道筋を、とりあえずこの段階で整理しておきたい。というのは、現状から見ても、メディアで取りざたされるように「金正恩氏を中心とする集団指導体制」といった形で、あの国が今後、しばらくとはいえ安定的に推移するとは到底思えないからだ。

1976年9月9日に中国で毛沢東が死んだ。当時の毛は83歳、数年前から肉体的には衰えを見せていたが、圧倒的な威信をもつ独裁者であることにかわりはなかった。後継者には華国鋒という人物がすでに指名されていたのだが、いざ毛沢東が死んだとなった後、中国共産党では新しい体制を始動させるためにどうい

う活動が行われたか。

9月18日に葬儀をおこなうことは決まったが、それ以外はなにも動きはなかったと言っている。当時の中国共産党上層部は毛夫人の江青女史を中心とする、後に「四人組」と称されるグループと、葉劍英や李先念といった長老グループが対立し、その中間に華国鋒がいたのだが、それぞれが思惑をかかえてにらみ合っていたのである。結局、長老グループに背中を押される形で華国鋒が「四人組」の逮捕という荒業に出たのは、毛の死後およそ1月を経ってからであった。

北朝鮮の場合はどうか。金正恩が後継者であることは1年前から決まっていた。金正日の死後、彼が朝鮮人民軍の最高司令官となったことは発表されたが、あの国の支配機構である朝鮮労働党、国防委員会のそれぞれにおいて、彼がどういうポジションにつくかということ、1月中旬現在、なにも明らかにされていない。今後の段取りも明らかでない。おそらく毛沢東死後の中国共産党上層部と同じく、各勢力がにらみ合い、牽制し合っていないかと想像される。

北朝鮮上層部の権力構造がどういう分布になっているのかが外部からはうかが

い知れないのだが、労働党にしろ、国防委員会にしろ、内閣にしろ、金正恩をトップに置きさえすればすむということではないはずで、それにはそれなりの上層部の人員の再配置がともなうはずだ。

トップに立つ人間に威信があればそういう人事は比較的容易であろうが、金正恩はおそらく巷間伝えられるように張成沢・国防委員会副委員長ら金正日の側近グループと軍・党の長老たちという2つの勢力に支えられる存在であろうから、権力の再配置はそれらの人間たちの談合の成否にかかるといえる。今はまだそれぞれが腹のさぐりあいをしている段階であろう。

それがいつ具体的な動きになるかが当面の焦点だが、それまでは集団指導体制と言えるようなものではなくて、おそらく無政府状態に近いはずだ。

集団指導体制という、権力中心が不明確な統治体制がしばらくでも成立するためには、統治者による特段の行政施策が講じられなくとも、国民生活がとりあえずは支障なく回転していくという条件がなければならない。しかし、あの国にはそれがない。食糧不足、エネルギー不足、物資不足は慢性的であり、国民にそれを耐え忍ばせていたのは、反抗すれば過酷な処罰を受けるといふ恐怖であった。

したがって権力の中心が欠けたとなれば、支配集団の内部では食糧を含めて「富」の争奪が始まるであろうし、生産者は生産物を国家の流通ルートに乗せずに値段を吊り上げて闇ルートに流すことになる。そのいづれとも縁のない庶民はその境遇から逃げ出すほかはなくなる。この冬から食糧の端境期にかけて起ることはまず脱北者の激増であろう。1989年に東ドイツが崩壊したきっかけは国民の集団脱走であった。東ドイツの場合「脱東者」の受け皿は西ドイツ以外にはなく、ハンガリーなどが東ドイツ国民の通過を認めたために、脱走はスムーズ(?)に行われたが、北朝鮮の場合はどうなるか。

常識的に考えて、脱北者は西の中国と南の韓国の両方向(一部は北のロシア)へ向うであろう。これまでは北朝鮮の国境警備兵がブレーキの役割を果たしていたが、権力中枢が空白となれば、警備兵は賄賂でも手にすれば、これまでのように脱北者を制止する理由はなくなる。出る側のブレーキがなくなれば受ける側は堰き止められなくなる。いくらなんでも生活ができなくて出てくる大量の民衆を武力で追い返すことはできないだろう。これは中国、韓国ともに恐れていた悪

夢のごとき事態であり、それゆえにこれまで援助を続けてきたのだが、ついに悪夢が正夢になる日が来そうである。東ドイツの場合と違って、事態を複雑化するのには、受け皿に中国と韓国のものであることである。

ドイツの場合は東の政権が崩壊すれば西と統合する以外に選択肢はなかったが、北朝鮮の場合、中国も韓国も基本的には引き受けたくはない。と言って、完全な南北統一が実現して大韓国が鴨緑江まで広がってくる(一緒に米軍基地も)ことは、中国にとって容認できまいし、また中国が北朝鮮に完全なカイルイ政権を打ち立てることも、韓国にとっては民族感情からいって我慢できまい。

となると、当面は中韓両国が崩壊に瀕した北の政権を倒さないように、脱北者が急増しないように、食糧援助などの面で協力しながら、同時に相手の勢力が強くなりすぎないように牽制しあうという状況が現出しそうである。

いづれにしても北朝鮮の権力層にどういう腑分けが生ずるか、軍はどう動くか、民衆はいつ動き出すか。変数の多い方程式であるが、今年のアジアの地図が塗り変わる年になりそうである。

(当協会理事)